

富籤

ВЫИГРЫШНЫЙ БИЛЕТ

アントン・チェーホフ Anton Chekhov

青空文庫

イワン・ドミートリツチは中流階級の人間で、家族と一緒に年に千二百ルーブルの収入で暮らして、自分の運命に大いに満足を感じている男であった。或る晩のこと夜食のあとで、彼は長椅子ながいすの上で新聞を読みはじめた。

「私、今日はうっかりして新聞も見なかったのよ」と彼の細君が、食器のあと片付けをしながらい言った。

「当り籤あたくじが出てないか、ちよつと見て下さいな。」

「ああ、出てるよ」とイワン・ドミートリツチは言った、「だけど、お前の富札しちながは質流しちながれになつてるんじゃないのかい？」

「いいえ、火曜日に利子を入れて置いたのよ。」

「何番だったね？」

「九四九九号の二十六番ですわ。」

「よしよし、……ひとつ探してやろう。……九四九九の二十六と。」

イワン・ドミートリツチは籤運などは信用しない男であったから、ほかの時なら何と言われたつて当り籤の表など振り向きもしなかつたにちがいない。けれど今はほかに何のす

することもなし、おまけに新聞がちようど眼の前にあるので、彼はついその気になって番号を上から下へと指で追って行つた。するとたちまち、まるで彼の不信心を嘲笑うかのように、九四九九という数字が彼の両眼に跳びついて来た。彼はもう札の番号などには眼もくれず見直しもしないで、いきなり新聞を膝の上に落としたかと思うと、まるで自分の腹の上に冷水でもはねかけられたように、鳩尾のところみずおちに冷やりと実にいい気持がした。擦くすくすつたいような、空恐ろしいような、妙に甘つたるい気持がした。

「マーシヤ、あつたぞ、九四九九が！」と彼は胸間声どうまごえをあげた。

細君は彼のびっくりしたような呆れ返つたような顔をじろじろ眺めて、これはふざけているのじゃないと思つた。

「本当に九四九九なの？」と彼女は顔色を変えて、折角たたんだテーブルクロスをまた卓の上にとり落としてしまった。

「そうだ、本当なんだ……本当にあつたぞ！」

「でも、札の番号はどう？」

「あ、そうだつて。まだ札の番号って奴があるんだね。だが、お待ち。……ちよつとお待ち。いいや、それが何だというんだ。どっちみち、俺たちの番号はあるんだ。どっちみち

だよ、解^{わか}るかい？……」

イワン・ドミートリツチは細君の顔を見ながら、まるで赤ん坊が何かきらきらする物を見せられた時のような、幅つたるいほかんとした笑顔になった。細君も笑いだした。彼がただ号の番号を言っただけで、この幸運の札の番号を急いで探さないと、彼女にもやはり楽しみだつたのである。ひよつとしたら舞い込むのかもしれない幸運の期待で、自分の心を苛^{いら}立たせ焦^じらすのは、何とまあわくわくして面白いんだろう！

「俺たちの号はあつたんだ」とイワン・ドミートリツチは少し黙ってから言いついだ、
「つまり、俺たちが当たつたのかもしれない見込みがあるんだ。見込みだけなんだよ。けど、その見込みは儼^{げん}然としてあるんだ。」

「そうよ、だから見て御覧なさいよ。」

「待て、待て。幻滅の悲哀を味わうのはまだあとでもいいさ。上から二行目だから、つまり七万五千ルーブルという訳だ。そうなるともうお金じゃない、力だ、資本なんだぞ。今すぐ、ひよいとこの俺が表をのぞいて見る、——すると、ちゃんと二十六なんだ。ええ、どうだね。俺たちが本当に当たっていたら、いったいどうなるんだね？」

夫婦は思わず笑いだして、もう何も言わずに長いことお互いの顔を見詰め合っていた。

幸運が舞い込むかもしれないという考えで、二人ともすつかりまごついてしまった。この七万五千ルーブルで何をしようか、何を買おうか。どこへ出かけようか、——そんなことは思いにも浮かばず口にも出せなかった。彼等はただ、九四九九と七五〇〇〇という数字のことばかり考えていた。その数字ばかりを思いに描いていた。大いに可能性のある幸福それ自身の方へは、どうした訳か考えが向かなかつた。

イワン・ドミートリツチは新聞を両手に握りつぶしたまま、部屋の隅から隅へと二、三回往復した。そしてやつと最初の深い感動がしずまって来たとき、少しずつ夢想をやり始めた。

「俺たちが当たつたのだとしたら、どうなるんだ」と彼は言った、「それこそ新生涯だ、大団円だ。私はお前のだが、もしあれがこの俺のなら、俺は勿論もちろんまず第一着に、二万五千ほど投げ出して何か地所といったような不動産を買い込むね。それから一万はそれにくつついてくる色んな費用に充てるあ。造作のやり直しとか、旅費とか、税金とか、そんなものね。……あとの残りの四万は銀行に預けて利子を取るんだ。……」

「そうね、地所は素敵だわ」と細君は言つて、両手を膝の上に落しながら坐り込んだ。

「どこかツーラかオリョル県あたりがいいな。……第一に、別荘なんかは要らないし、第

二に、と言つて上り高は確かでなくちやあね。」

そして彼の想像のなかに色々な光景が群がり寄せて来て、それがだんだんといよいよ美しくいよいよ詩的になつて行つた。そのどの光景の中に坐っている彼の姿も、みんな満腹しきつて、安樂で、健康で、温かいどころか熱いほどだった。いま彼はオクローシカという氷のように冷たい夏向きのスープを詰めこんで、川岸の熱いほど焼けた砂の上に仰向けに寝ころがる。それとも庭の菩提樹の蔭の方がいいかな。……とにかくとても暑い。：小つぽけな男の兒や女の兒たちが、自分の身のぐるりを這い廻りながら、砂を掘つたり草のなかの飄虫を捕まえたりしている。何これと言つて考えることもない。ただ甘い夢想に耽つている。今日も、明日も、明後日も勤めに出なくていいのだ、とそんなことを身体ぜんたいで感じてゐる。寝ころんでいるのが厭きてくると、こんどは乾草の原つばへ出かけたり、森へ茸をとりに行つたり、でなければ百姓が投網をするのを見物する。日が沈むと、タオルや石鹸を持ってゆつくりと歩いて水浴場へ行く。行つてからも別にせかせかせずに、悠々と着物を脱ぎ、裸になつた胸を丁寧に掌で撫でまわしてから水につかる。水の中には、ぼんやり透いて見えるシャボンの環のまわりを、小っちゃな魚たちがちらちらしているし、また青々した水草の揺れるのも見える。水浴がすむと、クリームと牛

乳入りのビスケツトでお茶を飲むことにする。……晩は、散歩をするかそれとも近所の人たちと骨牌^{カルタ}をやる。

「そうね、地所が買えたらとてもいいことね」と細君もやはり何やら空想しながら言つた。すつかり自分の考えで魔法にかかつてしまつてゐることは、その顔で、よく解つた。

イワン・ドミートリツチは引きつづいて秋の光景を描いて行つた。時雨^{しぐれ}、肌寒い晩がた、それから小春日和。……この季節には庭や菜園や川岸などの散歩はいつもより少し長めにしなければなるまい。それは、そうしてすつかり身体を冷え切らせておいてから、大きな盃^{さかずき}でヴオト力をぐいとやるためなのだ。それから塩漬^{ういきよう}けの茸^{ういぎよう}か、香漬^{ういぎよう}けの胡瓜^{ういぎよう}をちよつとつまんで、またもう一杯ぐつとやる。子供たちは菜園から人參^{にんじん}や大根の土の香のぶんぶんする奴を引つこ抜いて駆け出して来る。……やがてこんどは長椅子に思いきり手足を伸ばして寝そべり、何か絵入り雑誌を眺める。そのうちに、その雑誌を顔の上に伏せてチヨツキのボタンをはずし、うつらうつらと夢路^{たど}を辿る。……

小春日和が過ぎると、曇つた陰気な季節になる。夜昼の境目もなく長雨が降りはじめ、裸になつた木々が泣く。冷たいじめじめした風が吹く。犬も馬も鶏もみんなびしょ濡れで、しよげ返つて小さくなつてゐる。散歩どころか家からひと足だつて出られはしない。一日

じゆう部屋の中を行ったり来たりして、怨めしそうに陰気な窓を睨にらんでいなければならぬ。ああ退屈だ。

ここまで来たとき、イワン・ドミートリツチは考えを中止して細君の方を見た。

「ねえ、マーシャ、俺はそれよりも外国へ出かけるね」と彼は言った。

そして彼は、晩秋になって外国へ出かけたたらどんなに素晴らしいだろうと考えはじめた。

どこか、南仏か、イタリアか、それともインドあたりへ。

「私だつて、きつと外国へ行きますわよ」と細君が言った、「もういい加減で札の番号を見てちょうだい。」

「お待ちよ、まあ、もう少しお待ちよ。……」

彼はまた部屋の中を歩き出して、空想をつづけた。こんな考えが浮かんで来た。——本
 当に女房も外国へ出かけるとしたらどんなことになるだろう。旅をするならひとり旅に限
 る。さもなければ、浮気で明けっぱなしで、その時々のことしか考えぬ女たちと一緒に限
 る。ところが、俺の女房ときた日にや、旅行の間じゆう子供たちのことばかりよくよ
 心配して話すだろう。溜ためいき息はつき通しについて、一コペック出すにもびくびくと顛ふるえる
 だろう。……イワン・ペトロヴィチは細君が汽車の中で、どっさりの包みだのバスケツ

トだの合財袋のなかに埋つて坐つてゐる有様を想像した。旅の疲れが出て頭痛がするとか、大変なお金を使つてしまつたとか言つて、溜息をつきながらぐずぐず言つてゐる。汽車が停まると自分は、お湯だのバターパンだの飲料水だのと言つて、停車場じゆうを駈け廻らなければなるまい。……女房は高いと言つて食堂車へはとも行くまい。……

『だが女房は俺にもとてもけちけちするだろうな』と彼は細君をじろりと眺めて考えた、『あの札は女房ので、俺のじやないんだからな。それにしても、いったい女房なんか外国へ出かけて何になるんだ。結局行かないのも同じことさ。ホテルに閉じこもつたきりで、この俺まで傍から放しはしまい、……ちゃんと解つてるさ。』

そして彼は生まれてはじめて、自分の細君がすっかり老けふこんで、容色きりようが落ちて、身体じゆうぬかみそ糠味噌の臭いにおが滲しみこんでしまつてい、いっぽう自分の方はまだ若く、健康で、新鮮で、もういちど結婚してもいいほどの男振りなことに気がついた。

『そりや勿論こんなことはみんな、詰つまらぬ馬鹿げきつたことさ』と彼は考えた、『だがだ、……女房が外国へ出かけてどうしようと言うんだ。行つたつて何が解るものか。それなのに、女房はきつと出かけるにちがいない……、ちゃんと解つてるさ。……ところが女房にとつちや本当のところ、ナポリもクリンも同じことなんだ。ただ俺の邪魔がしてみたいの

さ。俺はきつといちいち女房に束縛されちまうにちがいない。解ってるさ、お金を受け取ったら最後、女の流儀ですぐさま錠前を六つも掛けてしまうのさ。……俺には拝ませてもくれないんだ。……自分の親類にばかりばっばして、この俺には一コベックごとにけちけちするんだ。』

イワン・ドミートリツチは細君の親類のことを思い出した。兄弟たち、姉妹たち、伯母さんたちに伯父さんたち、どれもこれもみんな籤が当たったことを耳にするや否いなや這いこあぶらんできて、脂あぶらっこい笑顔をとり繕つくろいながら乞食こじきみたいにねだりはじめるだろう。実に根性のまがった厭いやな奴らだ。いっぺん遣やつたら後を引くし、もし遣やらないと、呪のろつたりくだらぬことを言いふらしたり、色んな仕返しをはじめるんだ。

イワン・ドミートリツチはこんどは自分の方の親類を考えはじめた。すると今まで何の気もなしに眺めていた彼等の顔つきが、胸のむかつくほど憎らしくなった。

『実に何たる害虫どもだ！』と彼は思った。

すると細君の顔までが厭な、憎らしいものに見えはじめた。細君に対する遺恨で胸のなかが煮えくり返って、彼は憎々しげに考えた。

『この女は金に対する觀念なんかまるでないんだ。だからけちけちするんだ。もし籤が当

たつたとしても、この俺には百ルーブルとはよこすまい。あとの残りは——錠前だ。』

そして彼は笑顔どころか、憎悪に燃えた眼つきで細君を睨みすえた。彼女の方でも嫌悪と怨恨えんこんのごちやまぜになつた眼で夫を睨み返した。細君にも自分の計画や思惑や、虹霓にじのような夢想があるのだった。そして自分の夫が今なにを空想しているか、とてもよく察しがついた。自分の当り籤にまず第一に熊手を差し出す者は誰なのかを細君は知り抜いていたのであつた。

『他人ひとの懐を当てにして、よくもそんないけずうずうしい事が考えられたものね!』と細君の眼が語っていた、『いやなことだわ、あなたにそんな事をさせてなるもんですか!』
夫は細君の眼を読んだ。すると彼の胸は嫌悪でいっぱいになってしまった。そこで彼は細君をやつつけるために、構わず新聞の第四面に眼を投げると、いとも厳かな口調で読みあげた。——

「九四九九号、第四十六番、二十六番あらに非ず。」

希望も憎しみも、両方ともいつぺんに消え失せてしまった。たちまち、イワン・ドミートリツチにも細君にも、その部屋が薄暗く狭苦しく安っぽく見えはじめ、今しがた食べた夜食さえもがちつとも腹の足しにならずに、ただ胃の腑ふの下のところたまにぼとんと溜たまつただ

けのような気がした。宵よいの時間までが長つたらしく退屈で堪らなくなった。……

「一体これは何という態さまだ！」とイワン・ドミートリツチはそろそろだだを捏こねはじめた、

「一歩あるけば、きつと紙屑かみくずを踏んづけるんだ。見ろ、この何だかの屑や殻を！ 一ぺ

んだつて箒ほうきを手を持ったこともないんだ。こいじや、厭でも出て行きたくなる。悪魔めに

さらわれてみたくなつちまう。俺は出て行くぞ。そして一番先にぶつかつた柳の木で首を

縊くつちまうぞ！」

(В ы и г р ы ш н ы й б и л е т , 1887)

青空文庫情報

底本：「カシタンカ・ねむい 他七篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年5月16日第1刷発行

2008（平成20）年6月25日第2刷発行

底本の親本：「チエーホフ全集 第六卷」中央公論社

1960（昭和35）年発行

入力：米田

校正：noriko saito

2010年7月5日作成

2012年2月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

富籤

ВЫИГРЫШНЫЙ БИЛЕТ

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 アントン・チェーホフ Anton Chekhov

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>